

「水曜サロン with 赤堀会長」第6期 第9回(通算84回)

学校全体で取り組む生成AIの活用～子供の学びと校務の効率化～

1. 内容

○学校運営のビジョンと信念

- ・次世代のチェンジメーカーを育てる。
 - ・一人一人が活躍できる力を育てる。
- ICT教育、プログラミング教育、STEAM教育、英語教育、アクティブラーニングなど多様な教育を展開

○生成AIの活用

- ・子どもの学びと教員の業務効率化を目指す。
- ・(中1国語の例) 詩の読み取りに生成AIを使用。作者の意図をまとめるに当たって、生成AIが作った同じタイトルの詩と比較し、人間としての情感について考えさせる。
- ・(小1道徳の例) 「むねにとげがささる」という表現の意味についての質問の生成AIの回答は「胸部に小さな鋭利なものが刺さる」というような無機質なもの。それを見せて子供たちの「何か違う」「心のことだと思う」という考えを引き出す。
- ・(中学地理の例) 「近畿地方の地方課題を解決する」というテーマで、自分が考えた解決方法に対して、「海外の事例は?」「もっと予算のかからない方法は?」など、多角的な検討の視点のアドバイスを出してもらうことで自分の考えをブラッシュアップする。
- ・(校務の効率化の例) ピクトグラム作成、データの集約、保護者へのお知らせ文書や議事録の作成などに活用。

○生成AIの教育的効果や留意点

- ・自分が描いたゴールイメージは他者との対話で広げられ、生成AIとのやり取りを通じてさらに広い視点を持つことができるようになる。
- ・授業の振り返りの入力→授業のねらいに対して不足があれば生成AIから問い返し→ねらいに沿った振り返りができるようになる。ただし、あくまで生成AIは伴走者であり、最終的には子どもたちが自立して考え、行動できるようになることを目指さなければならない。
- ・相手の考えを批判しにくい面があるが、生成AIに対してはクリティカルに考えられる。
- ・「AIは人間を退化させると思っていたけれども、AIを動かすためには知識が必要だと思った。」「AIを使えるようになるためには勉強が必要だと思った。」という生徒の反応に、先生方も生成AIの活用に納得できた。

2. 所感

ご講演の中で最も心に残ったのは「信念」という言葉でした。「チャレンジには『信念』をもって取り組んでいる」「次世代で一人ひとりがそれぞれに活躍できる力を育てるという『信念』をもって」「最先端のICTを使った教育というのはマストであるという『信念』をもって」というように中村先生は何度も「信念」という言葉が使われていました。一般には「教育『理念』」という言葉が使われることが多いと思いますが、先生方が信じて念ずる強い思いをもたれていて、それが学校の文化になっている様子が伝わってきてたいへん印象的でした。

本講演では生成 AI をテーマとしたお話でしたが、おそらく、先生が挙げられた ICT 教育、プログラミング教育、STEAM 教育、英語教育、アクティブラーニング、それ以外の日常においてもこの「信念」に基づいた一本筋の通った教育を行っていらっしゃるのだらうと思いました。

生成 AI に関しては、授業においても校務においてもすでに活用のしどころをつかんで整理されていて、たいへん勉強になりました。生成 AI をある意味「客観的な存在」と置いて、子供たちの対話の相手としたり、子供たちの考えを広げたりする活動が多くありました。これらの取り組みは、他の学校にとっても大いに参考になるものであり、今後の教育の在り方に大きな示唆を与えるものであると感じました。

中村先生、貴重なお話をありがとうございました。